



朝本

醉菩提

秋

13
3047
9



時
3047
9

縮妻表紙後編本朝醉菩提後帙下冊

東武

醒醒齋山東京傳譯

醉月堂

阿多



赤繩囁累品第十五

去程に小山三の権亦六が家に逗留し。わづ春にゆきつゝ、折琴姫の
 おんやへ番作がゆへと尋に再又旅立べしとあひ居るに前の年
 金剛山にて狒々に飛礫と打りけりさる額の痛もはよは寒気よ
 再発し頭痛の病とありて頭もわけど打臥るれ亦六夫婦へ活計と
 やめて側とてあれど看病し百薬と盡すととどを露とるも験なく。
 漸々にかりぬ病とぞありよる亦六於三輪にゆひるに母公の仇打佐木
 の家の歩再與一才とニツにも分てわくおぼめを大切のあん承わさる。
 我く余にわえても本復とさせやさねばなりと病人も看病し

本朝醉菩提後編

瘦る夫婦ぞよのりき。まゝに或人のいなる頭痛と治るに奇妙の言
あり。戦場にて打死さるる人の又い自死せしむる跡と吊者も無縁の
人の首とれぬ七日が間香花と手向て其霊と祭る。葬て得さるれば
其慈悲善根の功德よりいふを強頭痛にては忽平愈疑はしと
物語と亦六度て於三輪に對ひ。ゆづくの夏むきども。これと得こと
急にあらざる夏むればせんくさりと。本意みげ小語ゆきを居らるる
爰に亦此村を多に草の菴と結て独住貪るし乃老女あり。がらゆら
白髪の雪とくま。額に皺の波とくへ寒夜にさへ一重乃襪襪と
著てりづりに肌とかくその人。人又雇色賃仕夏むてやうく。露令と
つゆだるる。此時亦六が門と過夫婦の物語と老は似合ぞ耳を今
きつけて裏に入今うけはらひきを頭痛の病の夏むとのこまひ。幸

頃日葉屑川の下さうふて何者ともあまごど自頭とかき切て亡たる
者のいへ心若此婆々に五索子をかりの錢とあらしむ其首とのらひ取て
糸らとべーとゆいれ。亦六は大喜びゆいんと五索子の錢とつるべえに
それとのらひ来りてえよ。さうくせよといをせ。婆々へらるるえよとて
ぐーく出たぬ。ゆて此日の夕暮小かの雇婆く瓦の壺に首と入りら
来りて夏むれば亦六は貪るふその一錢五索子とつるべえに婆々へ
いとととと。あひがけく此錢でよの年ととりまをこそ。うけとさめてぞ
帰る。借亦六への首と取りて机にすゑ。香花と手向て打むらひ。
ゆづりける人々も。これども主君の頭痛平愈させぬ。今日を
乃今日とさうら後。まても年忌仏事と管て跡懸よとむらひ。南
南を阿弥陀仏をむらむとつと回向して。七日が間まらり。夫の借

どのまひて柝木乃かきりて高坐とをりしと打ぬべ。ツクエいぞもハ
 居睡しるも目と醒し。寐そつうも起上りて。そあかりらさるるかと
 取とそつうて居たり。一休又のるる。此時極樂乃總大将阿弥陀仏
 の出立の赤色赤光。白色白光の錦乃鎧直垂小相好莊嚴の撃手
 とし。悉辱のおん鎧に大慈大悲の未金物打ると肩小ぶくくつらぬ
 三身耶一の鉄形打ると八万四千の白星乃かん甲と猪首に著ぬ
 とつらぬ。平八願差る胡録に僧祇劫経なる功德の須藤の弓よ
 妙觀察智の幡とす。青蓮乃かん外背と一なめぐしとす。つらぬ
 光明遍照十方世界とぞうかたる。誠になんさたかん定る。去程
 諸仏母の大軍。日とえつとて極樂園と出陣あり。功德莊嚴乃旗
 捺物と麻手訶菩提の山下風に翩翩と吹うへを。十万億土と一こひに

華頭河の此方多六道の辻まで押寄ぬ。笙篳篥を吹りして讀經の
 と一度に咄とむげさへん千部供養の如くや。ありがかりなる次第あり
 寐耳に水乃地獄城あり。三角眼回々鼻のそや打歩註進くと叫つて
 令神司録記神五道冥官俱生神奪衣婆懸衣翁阿防羅利五色
 の鬼無量の異類无数の鬼神とささぐて。跋提河の辺修羅道は押出
 鉄乃楯とす。淨頗梨鏡とす。焦熱地獄より大金とさうとせよ。鉄を
 湯に漏し敵近し。熱湯とあひせかけんとや。大地と掘て猛火
 と籠坎穿とまうけたり。寂滅為樂の紙幡と无常の風にひるぐ。銅鑼
 鏡鉄と修羅の鼓打ませ。罵詈訛流の親波と一なに咄と合せ。ハ
 百千の華礼と一なにさる。如くや。ましまがかりなる光景なり。又柝木

少く高座とらうと打ちし。時に地獄の陣中より鬘黒に血眼多き武者一騎血盆めて深みし。赤地乃錦乃鎧直垂。阿鼻叫喚乃火威の鎧と草摺長にやまら。鉄乃簾に時鳥乃羽と以てらざる。矢と北四差。頭高に負なり。不産女地獄に生る竹と七りぢりぢり。塗筆乃弓と。劔山よりそと取る。鉾と持畜生道乃牧と。疾駒乃大逞きに録鬼の持る飯椀に燃立をり。紅の厚總乃鞆と熱て。二河白道乃河原面にすみ出。鞍坪ははつ立。上りて大音あげ。柳これり。一百三十六地獄の總大將閻魔大王乃臣下。九王の裏に股肱耳目とよぶ。五道官の轉輪王と我事なる。吾もろん。佛母の名家てこま出。花やうる。打物して。諸見物の睡をさ。ゆくと。廣言と咄。勢探てり。浄土方の陣中

より小箭の日照太郎と名家て。日光智徳乃鎧。小瓔珞華鬘乃捺物と。青蓮華に打家てす。無盡功德の利劍と抜て斬て。轉輪王ニヤこま。小冠者哉とあ。善惡応報因果乃鉾と車輪乃如く。炎と踢立て戦。日照太郎が迷暗照破乃する。敵始乃廣言に似も。身とらめて。逃らる。これと戦乃始と。仏鬼兩軍入乱。地獄方に鉄火とや。極樂方に蓮華と雨。勢猛く戦ぬ。火花と散と。莫。此時は。所に。生死の海より。弘誓の船を。三途の川は。漕。地獄方の者。これと見て。伏勢。野小副將軍觀音九法門の。聖衆化仏と。大光明と。舟。船櫓に。妙。音。の。衆生を。

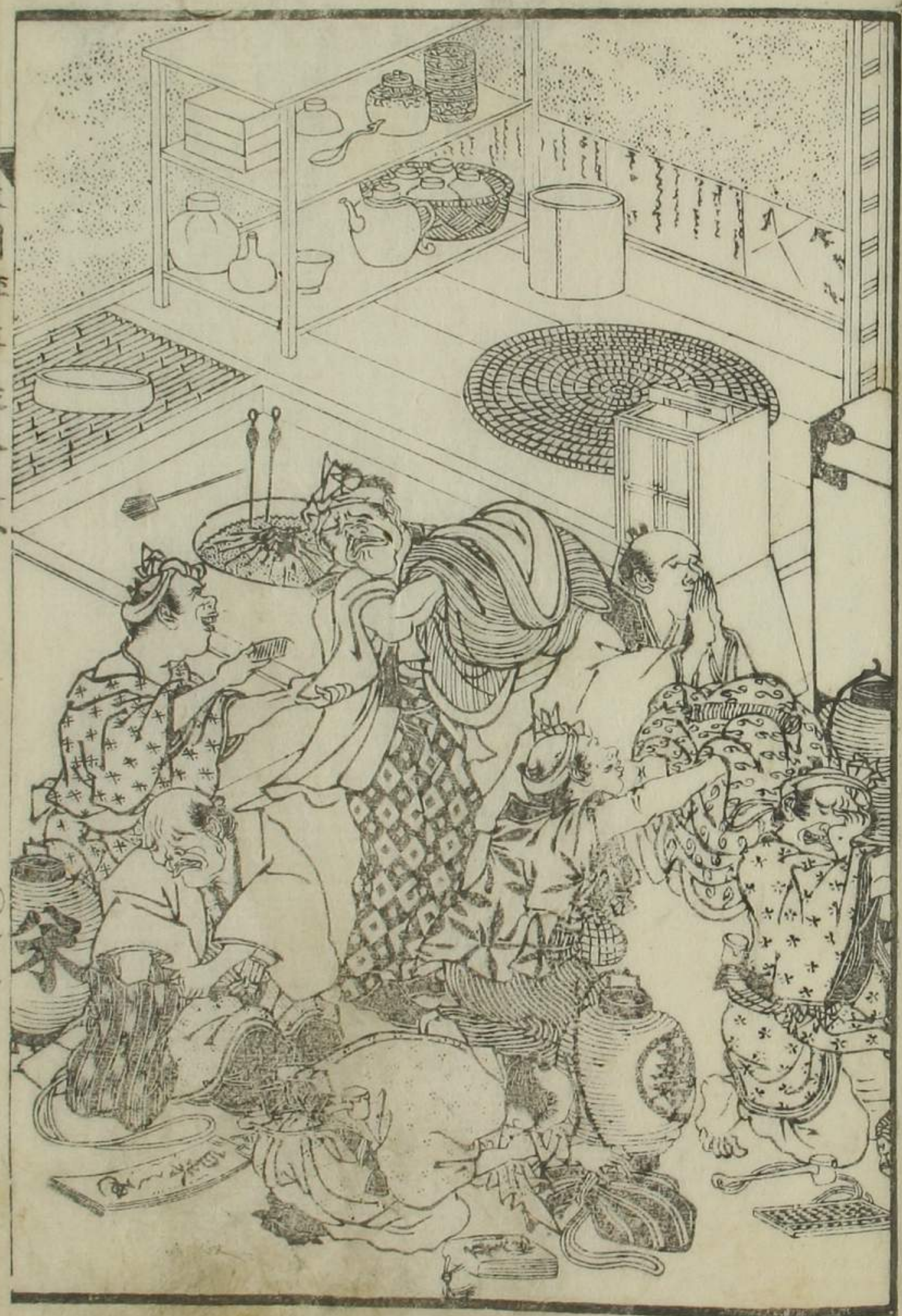
つさき正覺ととらじとらひきりする際陀仏の副將軍念彼觀音の千
あまのわらへんよくちとくく聖多の千の歩和毎に大悲の弓の智慧
の矢とらめて一度もあせを千の箭さへ雨霰と降りつて鬼神の上よ
乱もあつまむ。大將閻魔ととらむじて大は狼狽敗北。鉄門のうらむ七
逃ももる。これより七日七夜が間合戦ありとらむ。ふふ地獄勝利を得る。
閻魔大王冠と脱て降参しなれば阿防羅刹の悪鬼ととらむ地獄中の
罪人どもとらむらむを心とわらむさせて新生の仏にあらはれ閻魔王
と始として冥官冥衆の姿と其終に曼陀羅の聖衆に引上げて等流
法身と地獄は仏国とらむ。唯心の浄土とらむ。鉄の湯とらむ。やぞ功德の水と
見えはらむ。妙覺の山とらむ。鉄の湯とらむ。やぞ功德の水と
あらぬ。仏鬼一如の道理以共悟らむ。衆生の心ぐめて地獄とも極楽とも

あるぞらじ。されば正法念経に閻羅獄卒に實者の情をわらむ。衆生安業の
かどりてこれとらむと説く。又法相は於繩起蛇覺とらむことあり。繩と
蛇とらむ。あそらしくとらむ。繩と見さむ。むきをおそらま。地獄と
あそらじとらむ。迷の前のま。菩提ありとらむ。悟ぬを苦く。いと
可愛の愛欲とらむ。おのの貪欲とす。正路とわらむ。おのれ
心ふ仏の名将勇士とらむ。あそらま。地獄城と攻破心の鬼と退治
らむ。唯心の浄土とらむ。時。あらま。活は仏とらむ。此世は安樂あり。
とのこまひてかけを。尻目にかけ。又のこまひ。いろがま。片肌
ぬいぐる。ありさぬ。修羅の誼。異。額。鉢。鉢。邪見。乃
角とらむ。ぞらじ。唯心の浄土。あつら。このこまひ。かひ。ひ。乃
たが。目と目とらむ。脱。肌とらむ。のり。ひ。乃。鉢。乃

大晦日の夜
かけ取どむに
談議と説く
まじりぬ
かけとりとも
泡沫至常の
おのこもりと
欲ぞとるれて
落涙
そ



野晒悟助



わなきうあつても忘るる。今頃わうにあらむと知らる。異見
 りて由爪火のよもせまに。積鼻禪又入つてとあて。一生とわがた
 死のほい夏や痛へーやと。つちの額とわい。托て。なげどかひの新仏
 枕念仏と隣りて。只やりまーとつちをわう。一度此世と去りの再飯と
 側み。といとわのきげにのさまへ。かけこいども。一同にわうりくと
 涙とこがし。わの氣のよまる。沙説法。さくオのモグよぶちまをが。こは
 物見と。ぢや。めらと其さた。このまをと。つち一休らまづさあひ。
 あれも哀おん声は。借敷てもかろ。もゆるねば。葬所はかろ
 支度とみ。棺桶とろのて。金ぐりの欲垢。けれと著物を
 ぬがせ。経帷子と著かえて。桶よとら。綿薄かひ无垢と打あひ。
 高盛の枕飯。線香や林香の匂も。いと哀れ。わうりくと。わうりや

惣領の七つをうの男の子。五つの祝袴著に著ら。野馬の深小を
 肩のせまの上下の。らひま。形は。大編笠。餘所の見る目も。涙多。罪障
 消滅せんも。往生極樂せんも。と。とめあひ。白ハガ。くもろと泣世
 ちや。由丁ど七つに。男の子と持て居ま。おに。つま。して。か。い。い。と。
 涙の露の玉銀に。財布の。と。と。あ。り。り。り。時。に。一。休。柵。木。小。て。高。坐。と
 いと。と。打。り。し。おん。色。高。く。ら。う。あ。げ。め。の。蜂。蟻。の。一。期。槿。花。の。夢。幻
 の。舟。と。持。て。利。欲。と。迷。ひ。う。う。く。と。ひ。は。く。か。ろ。光。陰。の。矢。立。の。筆。の
 今。毛。の。ち。ま。る。所。は。氣。も。つ。ど。畜。生。道。の。華。財。布。罪。の。料。の。目。を
 わ。う。そ。の。閻。魔。の。帳。と。う。ひ。ろ。げ。算。盤。の。玉。い。ん。げ。ど。も。急。珠。と。持
 へ。う。夏。も。う。く。か。う。ま。た。骨。の。提。灯。は。晦。日。の。下。水。へ。飛。越。て。も。冥。途。の。闇。へ
 いくせん物の報い。い。の。箇。々。が。此。一。休。を。も。た。る。や。う。に。冥。途。か。う

おんぞは慈悲に命とのべてうさされませ。畢竟欲とわらうまとも女房
子どとがわのゆさゆさ。其つらぬ妻子は別ま。かせたうら。銭金も其任
此女に残しおれ急死といふことと知るべ。なんくの誓文で无益な欲と
かりとましよ。お慈悲とくといひなれ。一休も頭とあり。イヤく今も
死せむるに。誓文もどくつら。此座と立バ又あり。今の安売るる
とのさま。酒屋の槽内目とまら赤めてすま出。これ一休さぬ。外の
者いりどあうど。拙者い欲と捨する。註批は目よわけん。と懐中しうら。
ちいさな帳と取りと。矢立の筆に墨とつけ。これうは。歩覽うさ。し。
あまに上。酒の代九貫八百六十四文。おひきうてまら。この如く爰で帳と
消まると。いひつ棒と引なれ。破九郎槽内と押のけて。おれ此古手屋も
酒屋とくたれ。負ごさう。これ見よ。ちんとし。つて。手もや。帳をさうい。

おみく棒とどひのうら。其外の人々。米屋の白八。薪屋乃柴六。塩
焼の分正次豆腐屋の豆右。清門青物屋の菜九。清門傘張の骨兵衛。
紺搦の茶褐助。布屋油屋味噌屋のめんく。十二三人居あつて。こを
かま。とと帳と出。おみくに筆ととり。棒十文字に引消て。うらと伏て
願へん。実目さな。き消さうら。一休莞尔と笑せぬ。善哉々々善男子。
悪にも強くも。うら。善にも強く。消きたり。愚僧疑なれ。ぞ。い。く
道術と。おと。う。と。目と。お。印と。お。小声よ。何や。う。あ。い。
う。これ。い。お。の。寿。余。百年。づ。い。請。合。ど。其。上。い。う。年。でも。勝。手
次第に。活。さ。う。な。れ。と。の。さま。親。喜。踊。躍。の。け。け。い。も。獲。生。する。こ。ら
も。て。中。く。う。さ。や。わ。り。が。や。已。悟。助。の。一。休。さ。ぬ。が。酒。を。わ。ら。と。わ。り
も。代。の。わ。ら。ぬ。遠。慮。な。し。い。う。でも。も。う。に。ご。り。ま。せ。と。酒。屋。が。い。く。

古手屋も一休さまがあさむら。夜更なりと蒲団なりと。損料は二
かしまあま。かけのこいせうけりども。機嫌をりてを飯りたる。あといんむらて
一休の長持より飛く。悟助と耳語笑ひる。折しを眠藏より。
突の一休立出あひ。いかに落藏主汝が譚義と奥あて。いと殊勝は覺
とのこまふ。落藏主頭とさげ。沙呵とさけり。彼寺師の房をを
愚僧とも見えあう。さりと幸に一休といひ。名を偽此落藏主が狂云
ふて。多疑強欲の野狐。さりと追やりていさる。一休のさる。汝が譚義
戲は似て佛智に多り。愚痴无智の輩が心の地獄と滅却せ。非常
迅速の理と示して貪欲非望と戒る。あむをれの譚義あり。我檀
越カ布施と得て。これにあり。さりと。彼等が貪欲と戒る。あむを
時節とあひ。さりとこれと。さりと。彼等无常と悟り。角折て飯ハ

突は汝が大功あり。明日の元旦。元且。元且。彼等に借る。價は勿論心じ。こそ
ふへ。おれ。金銭。此布施物と以て。残らば償か。さりと。このさまひて。
悟助に一袋の金と。後。又のさる。往古の大晦日にも。靈祭とせ。
夏ゆ。報恩。経。あむ。七者。落藏に。往來。さる。夏。六。な。あむ。七月。を。素。
十二月。晦日。午時。來。正月。朔日。夕時。報。と。あり。和泉。式。ア。の。歌。よ。む。人。の
來る。夜。と。宵。と。君。も。ま。い。我。住。宿。や。玉。さ。の。里。な。ど。も。り。り。あ。り
葉と師走の卅日。うれ。人の。食物。に。あ。く。と。り。ま。ま。と。枕。の。草。紙。に。も。あ。ま。ぬ。
兼好の時代。ゆ。い。や。せ。ね。ま。に。り。し。や。大。晦。日。の。さ。な。と。り。さ。る。条。よ。む。人。の
來る。夜。と。魂。系。る。業。い。此。の。都。は。ん。ら。れ。と。東。方。に。へ。る。わ。さ。る。夏。と。と。
のり。え。こそ。哀。さ。る。り。と。徒。然。草。に。あ。し。と。る。後。乃。を。わ。ど。夏。繁。く
さ。り。て。人。の。七。者。と。あ。む。ね。ど。も。七。者。の。安。樂。に。詣。來。て。路。頭。よ。ゆ。り。あ。り

不便なれば。我の此曉まで経て読ひつらるる。汝らもさうく休
りてぬいて。袈裟衣と著て立出ぬ。読経とあそび。村々
歩行のゆるが果て途中に迷ふ。わが亡者ども。一体のあんな社や
りをもそにさうつきて。浮べてたぐくと移るるも。妻の人こもり
活仏と云ふ敬せしも。さうあり

觸體化城喻品第十六

夫の叔父亦六の貧きうにのほく活計をやめて。小山とが頭痛の
まうひに心とそ。医師の謝物加持祈禱の物入など。万のつら
あつくありて。物さぬがらるる。病人はせせと。夫婦暗よ気とつら
まうに財衣服雜器と代りて。彼是の雜費にあて。いと貧苦よ
せまり。亦六か三輪小ひひて。そらんいつに。今日ハをてに

大晦日。人並に門松立注連のやうあり。春の用意とく餅一ツ
乾鯛一疋貯む。年木一束。むき便にたれへ。仕した夏にあつて。や
此村にも有徳人の魚懸。一番の鯛一本。塩鯛五枚。鱒二本。箸塗
箸漆の白小紀の團五番。鍋蓋まであつて。年とむる人もあり。妻は
ある人にくるべと。わさはしまこと。やと嘆息を。於三輪へ古扇あて
藥煮火とわみ。居るが。これとあて。ひひる。さびり。愁ひひな。いつわど
貧しく暮ても。夫婦なう。年と。幼者の病気も。生立を
此上も。喜びなり。小山と。さぬの。病病。日わ。ど。快気。あ。ぬ。
あま。氣と。あ。か。と。つ。膝元。に。乳。と。の。さ。を。杖。太郎。
雉来。よ。と。よ。び。け。家。の。竹。林。や。ぐ。て。の。雉。さ。び。出。く
餌と啄杉太郎に抱きて。雉車のそれさうで。翫物とあり。居る。かくて

大月年...

此日も暮るれば。雉もねらうに飯りて。於三輪へ行灯取りて火ととり。
 小山云々なるも葉とあげ。今とらくとおかきとわれ。此ひぬにりそぐんとさの
 乱髪ついでりあげてと梳に。けぐる今の瘦世帯辛若に老る面影へ。ひ
 鏡に知まらう。時に亦六ひの多平岡明神へ當所の鎮守乃神とらん。来年
 の惠方への神の方へあれ。惠方棚とまうけて。十二の灯臺へまきおけど。
 家内へ彼首と祭らうらん。さどかに灯明もさげが。今日へ已は彼と
 祭るも七日目の満願ゆて。あらまべ。別元且あれ。今夜九つと限は葬て
 つらとくちあらう。且一回向せむやとて。彼首の祭所とわらひる。小尻風
 と引あけて。灯とわげ。香と拈り。水と手向て念仏ととる。あしとさ
 若者の。鉦と打念珠とつまぐる。為体結句殊勝。又見えまらう。あて暫
 時とらうて。此方へいりまら。於三輪の。身も此手ついで。髪と剃せ



